

青梅市文化財ニュース

第214号

平成17年8月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館

(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

梅郷地区の梅干し作り

うめぼしの唄

二月三月花ざかり、うぐいす鳴いた春の日の楽しいときも夢のうち、五月六月実がなれば枝からふるい落とされて、近所の町へ持ち出され、何升何合はかり売り、もとよりすっぱいこの体、塩に漬かって辛くなり、紫蘇に染まって赤くなり、七月八月暑いころ三日三晩の土用干し、思えば辛いことばかり、それも世のため人のため、しわがよっても若い気で小さい君らの仲間入り、運動会にもついてい、まして戦のそのときは、なくてはならぬこのわたし。

これは、明治43年発行の尋常小学校読本巻五に載っている「うめぼし」と題された「詩」です。明治43年は、日清・日露戦争（明治27年～38年）が終結してまもない時期であり、この2つの戦争に出陣した兵士たちは、腰に梅干しを携行したそうです。

梅の木は、飛鳥時代（欽明天皇530年頃）に中国からもたらされたといわれていますが、もっと早く弥生時代には日本に入っていたという説もあります。また平安時代中期、村上天皇（在位946～967）が病気になり、梅干しと昆布入りの熱茶で治したという話も有名であることから、平安時代の中期には、確実に「梅干し」が存在したということでしょう。

日本に渡った梅の木は、日本の四季（梅雨も多いに関係する）と土質とによって、酸味の強い実をつけるようになりました。ちなみに台湾・中国で採れる梅の実は、日本のアンズやスモモのような味になり、日本の梅の実のように酸味が強くないそうです。（なお、台湾や中国には、梅干しを食べる習慣はありません）。日本独自の酸味の強い梅の実は、日本人の創意と工夫によって、日本でしか作れない《梅干し》という優れた食品を生み出しました。ただし、中国において梅の実の薬効は、漢方薬「烏梅（うばい）」として、前漢時代（BC206年～）ごろにはすでに利用されていました。

日本でも初めは薬用として利用されていて、体内に上った気や滞った気を下ろし、胸や腹が苦しいとき、それを取り除き、さらには手足の痛みや悪性の肉塊を取り去るなどとした文献もあります。また、平安時代中期のころ梅干しは、まだ庶民が気軽に食べられるものではなく、貴族たちの薬用を兼ねた貴重な食品だったと思われます。梅干しが広がり始めたのは、鎌倉、室町時代になってからで、禅寺の修行僧が、粥とともに梅干しを食し、武家の酒の肴にも供されるようになっていったようです。また、その薬効（解毒・整腸・食欲増進・消毒・気付け）は、経験的に理解されていき、戦場での怪我や病気の予防薬として戦国時代の武士たちにとって、なくてはならないものとなっていきました。現在、梅の名所となっている京都・紀伊田辺・小田原・水戸などは、戦国時代の武将たちが、梅の木

（裏面に続く）

を植えさせ、梅干しを作らせた名残りといわれていますが、なかでも小田原の梅は、北条早雲（1432～1519）が植えさせ、紫蘇を加えるという工夫もなされました。

市内の梅郷地区の梅林は、関東地方ではもっとも古いといわれています（『梅の健康法・梅の歴史とその効用』松本紘斉・文理書院）。青梅地方は、三田氏が鎌倉時代後期の1250年頃から、永禄6年（1563）に北条氏照に滅ぼされるまでの約300年間治め、市の設立や神社の整備などにも力をつくしました。梅干しが普及しはじめたのは、鎌倉時代といわれ、鎌倉の御家人の流れをくむ三田氏が、梅干しに目を向けなかったわけではないと思われます。

梅郷地区の旧上郷地区（現在の梅郷6丁目）の大聖院（金剛寺末）には、裏庭に樹齢700年といわれる『親木の梅』があります（現在は2代目）。700年前という言い伝えによると、この木は1300年（鎌倉時代末期）ごろに植えられたことになり、梅郷地区の梅の木は、この木を親木として次々に増やしていったものと伝えられています。また柚木町3丁目にある我が家の庭から「永仁5年（1297）三月」と「正安元年（1299）」と刻まれた板碑がでてきました。我が家は、親木の梅のある大聖院から西へ約1kmに位置し、旧鎌倉街道に面しています。また多摩川を隔てて三田氏の最後の砦である辛垣城の真正面にあたります。近くの民家（山下家）の墓地には、もっと古い正応3年（1290）の板碑があり、近くの忠堂院（即清寺末）の墓地にも多数の板碑や五輪塔が存在することから、1300年ごろの梅郷、柚木地区は、三田氏の影響を色濃く受け、かなり充実した生活を営む人々が存在したことを物語っています。なお、即清寺の創建は元慶年間（877～884）といわれ、建久年間（1190～1198）に畠山重忠が中興しています。また正安2年（1300年）に三田長綱は勝沼に乗願寺を創建し、三田氏が興隆してきた時期でもあります。

また梅郷地区は、中世から三田領柚保氷川郷下村と呼ばれ、今も小字名に梅の字がついているところが多くあります。下梅の内・上梅の内・梅ヶ久保・梅ヶ谷（うめがた）などがあり、柚木地区にも「梅ノ木峠」があります。江戸時代に入ると、梅郷地区は梅の名産地となっていて、文政年間（1818～1830）に書かれた『武蔵名勝図会』には、「その実を江戸に出せること馬に負わせて年々百駄に及ぶ」との記述があります。いつごろから梅干しが作られるようになったのか、はっきりした文献は見当たりませんが、以上のようなことから鎌倉時代末期から室町時代（1300～1400）ごろにかけてではないかと思われます。今年も家々で3日3晩の土用干しが盛んに行われました。

参考文献『梅の健康法・梅の歴史とその効用』松本紘斉・文理書院

『江戸っ子は、何を食べていたか』大久保洋子・青春出版社

『たべもの江戸史』永山久夫・河出文庫、『梅干し』法政大学出版部

『武蔵名勝図会』、『皇国地誌・下村誌』、『尋常小学校読本巻五』、『西多摩神社誌』、『多摩郷土史研究第62号「吉野梅花碑建立の夢」』、『小田原城歴史見聞館パンフレット』、『小田原本町「ちん里う」パンフレット』、

（文責 小川秋子）